葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ㉑

明治大学博物館　外山　徹

重倫の病状

安永四年（一七七五）二月。紀州家八代藩主重倫は積年の病気を理由に藩主の座を退いた。満二九歳になるかという若さであった。徳川将軍家の官撰年代記である『徳川實記』や明治期の編纂ながら紀州家の正史と言える『南紀徳川史』の記載は、隠居の事実はともかく、その理由である病気の実態については詳らかにしていない。

明和八年の状況

そこで、薬王院文書を通じて重倫の病状の推移について検証してみようと思う。そこから、寺社へ病気平癒を祈願する当時の人々の心性を導き出せるかもしれない。

重倫と薬王院との関係が密となったのは明和八年（一七七一）に遡る。本連載でも取り上げた八月付の直筆の書状は自身の病気の行く末について、薬王院隠居湛玄に問う内容だった。そこには、「死症」という深刻な表現もあり、また、自身の病気を「因縁」と疑うあたりからは、心理的な側面も考えられた。

『南紀徳川史』には、翌年二月に江戸城登城を取り止めた際の記述として「去年八月より御癪気にて」とある。「癪気」とは主に上腹部に起こる強い痛みのことで、下腹部の場合は疝気（疝痛）となる。痛みだけでは具体的な病名はわからないが、実は薬王院文書の中から重倫の症状について詳しく記した書面が発見された。

書面には「六年以前」「御国入り」という記載があり、重倫が初めて和歌山に赴いたのは明和三年なので、数えで六年後はちょうど直筆書状が届いた明和八年となる。重倫に対する触診の様子が記されているので、紀州家御典医による所見と推測される。その記載からは重倫の「癪気」の実情が判明する。症状としては腹・腰・背の違和感、腰のあたりの痙攣、肩や脇腹の張りが指摘されている。そして、「癪」について「大きく堅く覚えさせられ、この御癪お心下よりお臍下まで長くお背に着き」と述べているので、「癪気」とは単なる痛みのことではなく、腹部や背部に固いしこりができる症状という意味になる。また、便秘や魚・蓮根を食した際の消化不良といった内臓系の症状、夏に左右の手に血腫ができたという記述もある。初めて癪気を覚えたのが御国入りの時とあるので、この間、五年余りにわたりこの症状に悩まされてきたことになる。

記述の中には四・五年以前、寄生虫を吐いたとあり、症状からするとこれが病気の原因と考えられる。史料に記された重倫の症状はいちいち寄生虫症に符号するが、その具体的な内容は生々しいので、関心のある向きはインターネットなどでお調べいただきたい。我が国で寄生虫の予防が徹底したのは、衛生環境が向上した第二次大戦後のことであり、昭和戦前までは、寄生虫の感染は珍しいことではなかった。

病状の回復

直筆書状の翌年二月からは病気平癒を祈願する八千枚護摩供十座が執行された。五月にかけて十名の家臣が交代で代参に訪れるという大がかりな祈祷執行だった。同十二月の祈祷料奉納の書状には、七月からの「紀伊殿所労早く快然」「絶えずご祈祷ご執行」が記されていた。翌安永二年正月には災厄消除の星供、三月に山主秀興が権僧正拝任のため京都に赴く際にも洛中洛外諸寺社での祈祷が依頼されるなど、この一年半ばかりの間、重倫病気平癒の大々的な祈祷が続くことになる。

『南紀徳川史』では、安永二年二月六日の記事に「御癪気今もってしかとならず」と、ただ記されるのみだが、その文字の背後ではこのような大々的な祈祷があった。

薬王院による祈祷執行が、いかに重視されていたかは、細かな書状のやりとりにも窺える。写真はこの間のものと推測される重倫の病状の推移を報告する書面である。四月二五日付では、

紀伊殿容体続きそうろうて順快にこれあられ、惣体静かにこれあられそうらえども、未だ透っと致されず

と微妙な症状が述べられている。別の五月四日付は筆跡からは近い時期のものと推測されるが、

紀伊殿様体先日以来あい替わらる儀これなく、惣体おだやかにこれあられそうろう

と、目立った変化のないことをわざわざ伝えるなど、細に入った報告がなされているのが印象的である。

そして、湛玄に宛てた安永二年八月二三日の書状には、

中納言殿積気少々快方にこれあられそうろうに付、なお保養のため当秋中、国許へまかり越されそうろうはず

と記され、帰国後の十一月の書状では「益々御安全にて、御所労も先ずご回避これあられ」と明らかな改善の様子が窺われる。翌年夏の祈祷料奉納の際には、すでに「所労快然」の文字は無く「紀伊殿満足存ぜられ」という様子が伝えられることになった。

重倫の病状を伝える書面

ともかくも、薬王院による祈祷を経て重倫の症状は改善したことになる。安永四年閏十二月の書状では「中納言殿何のお障りもあらせられず、安全の事そうろう」と述べられる。それに対し「よって例年の通りご祈祷の御札・守護お指し上げ成られ」と祈祷継続の意思が示されるのも、その効験が意識されているからだろう。帰国七年目の安永九年ともなると、「いよいよ以て御快くこれあらせ」と記され、ここに至って「正月ばかり軽き御祈祷」ということになる。

祈祷が依頼される時

先の書面には医師の施療の様子も記されている。「お塞ぎ」とは気分がすぐれないということだろうか、あるいは悪寒を覚えた時には薬が処方されている。血腫は針を刺して血抜きをし、脇腹のしこりには針治療を試みるなどしている。当時の医療水準で手は尽くしたものの、改善を得ないことから薬王院への祈祷依頼に至ったということになる。

近年の研究では「病は気から」というのもあながち非科学的とも言えないようだが、江戸を離れて和歌山に戻った途端に症状が改善したのには、重いストレスからの解放もあるのではないか。重倫は元来快活な性格であったようだが、それ故に形式張った儀式の場などは苦手だったことが想像される。明和八年の参勤出立の遅れ、病気を理由とする登城や墓参の取り止めなど、心理的な側面も考えられる。

それから、重倫の言にある「因縁」であるが、実際、重倫の家系には忌まわしい出来事があった。曽祖父にあたる伊予西条藩主松平頼純が子頼雄の廃嫡にあたって諫言する家臣を殺害、後々頼雄は断食により自死に至ったという事件である。重倫の粗暴なふるまいを頼雄の祟りとする噂もあり、想像の域を出ないことは断っておくが、こうした過去を気に病んでいた可能性もある。

こと心理的な部分において、祈祷の効用は充分考えられよう。結果的に回復を見た重倫は、隠居の後も健康体を保ち、満八三歳の長寿を全うするのである。

× ×

重倫の病状を記した史料については、八王子市郷土資料館の柳沢誠氏による翻刻原稿の提供を受けた。本稿にその貴重な発見を反映する機会を頂いたことに感謝します。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。